

女子中学生が参加したいスポーツ及び
サッカー、フットサルにおけるイメージの差異

上野耕平・中尾美佳

**The Differences in the Images among Sports which Female Junior-high
School Students Hope to Participate in, Soccer and Futsal**

Kohei Ueno* and Mika Nakao**

Abstract

The purpose of this study was to clarify the differences in the images among sports which female junior-high school students hope to participate in (F-sport), soccer and futsal. The subjects of the preliminary investigation were 10 female students who have played both soccer and futsal. They were asked about their images of soccer and futsal to develop a questionnaire to measure the images of both sports by using a semantic differential technique. In the first study, the questionnaire which was developed through the preliminary investigation was given to 90 female junior-high school students who had experienced both soccer and futsal. In the second study, the same questionnaire was given to 130 female junior-high school students to measure their image of F-sport. From the results of these studies, it was determined that 1) the image of F-sport is closer to the image of futsal than that of soccer, 2) the similarities between the image of F-sport and the image of Futsal, and the distinctions between the image of F-sport and the image of soccer can be thought of as being composed of body contact, activity and looks. Consequently, from the viewpoint of the image of the sport, it is considered that female junior-high school students around puberty have a more favorable image of playing futsal than soccer because they care a lot about their body image.

Key words : mentality at puberty, women's soccer, tan, looks, futsal

*鳥取大学大学教育総合センター

*University Education Center, Tottori University

**鳥取県八頭町立中央中学校

Corresponding author kohei@uec.tottori-u.ac.jp

1. 問題の所在

近年、日本における女子サッカーは日本代表・Jリーグを中心に充実している。2004年のアテネオリンピックにおいて、日本女子代表チームがベスト8に進出したことは記憶に新しい。Jリーグや男子日本代表チームの活躍によってサッカーに関心が集まるなか、女子サッカーにおいても人気・実力共に着実に上昇しており、日本サッカー協会（以下、JFAとする）によれば、JFAへの登録選手数も増加する傾向にある（JFA, 2004a）。しかし、年代別に登録選手数（2004年10月末時点）を比較すると、小学生（12098人）、中学生（4267人）、高校生（6479人）となり、特に中学生の登録者数が大きく落ち込んでいる（JFA, 2004b）。登録者数の落ち込みの要因として、受け皿となるチームや指導者、さらに参加可能な競技会の不足が挙げられ、こうした環境の未整備が中学生年代における登録選手数を伸び悩ませている大きな要因であると考えられるが、彼女らの発達段階を考慮するならば、女子中学生特有の問題との関係が推測される。

女子中学生は一般的に思春期にあたる発達段階にある。神谷（1997）は思春期が第二次性徴の到来と共に始まるとしている。そして思春期は第二次性徴による身体的変化に精神的発達が伴わず、動揺や不安を抱える時期でもある。自分の身体と他者の身体を比べたり、自らの身体に対するイメージを強く意識する。特に女子における興味の範囲は、普段身に付けている洋服やヘアスタイルにも及ぶ。深谷（1986）は一般的に思春期にある子どもは非常に外見を気にするとしており、自らの身体に対するイメージを意識する傾向はスポーツへの参加に際しても認められると予想される。

サッカーは屋外で実施されるコンタクトスポーツである。多くの場合、練習や試合は土のグラウンドで行われ、ボディチャージやタックルが認められていることから、転倒によって擦り傷や切り傷といった外傷を負うことは少なくない。運動後はグラウンドの土で汚れ、冬期の一時期を除いては直射日光により激しく日焼けする。これらのことは、女子中学生が持つ自らの身体に対するイメージにネガティブな影響を及ぼすと考えられる。女子中学生にとってサッカーは魅力あるスポーツである反面、受け入れられにくい性質を内在していると推測される。

そこで本研究では、女子中学生の心理的特徴に見合うフットボール競技として、フットサル（FUTSAL）に注目する。フットサルは基本的に室内で行われ、ルールによりスライディングタックルやショルダーチャージが禁止されている。このことからフットサルはサッカーと比較して受傷や日焼けなどが少なく、自らの身体に対するイメージにネガティブな影響を及ぼしにくいと考えられる。つまり、非コンタクトスポーツであることや外傷を負いにくい、日焼けしないなどのフットサルの競技特徴は、サッカーとフットサルのイメージの差異に関係すると考えられる。

本研究では、まず予備調査において本調査で利用するSD尺度に含める形容詞対の選択を行う。そして本調査1では、サッカー及びフットサルを経験したことのある女子中学生を対象にそれぞれのスポーツに対するイメージについて、調査2では一般の女子中学生を対象に参加したいスポーツのイメージについて調査を実施する。以上の調査結果をもとに、サッカー及びフットサルの競技特徴を視点として、女子中学生がサッカー、フットサル、及び参加したいスポーツに対して抱くイメージの差異について検討する。

2. 予備調査

2.1 目的

SD 法を利用し、サッカー及びフットサルに対するイメージを調査するための形容詞対を決定する。

2.2 方法

2.2.1 対象者 サッカーとフットサルのどちらも経験したことのある大学生及び社会人の女性 10 名 (18-28 歳, 平均 21.3 歳) であった。

2.2.2 手続き 「サッカー及びフットサルに対するイメージに関する調査」というタイトルで、自由記述式の質問紙調査が行われた。サッカー及びフットサルに対して抱くイメージを、それぞれ思いっただけ記入するよう求めた。なお調査は 2004 年 9 月から 10 月の間に実施された。

2.3 結果

予備調査の結果、サッカーでは合計 44 項目、フットサルでは合計 28 項目の回答が寄せられた。サッカーに関するイメージでは「激しい」、「日焼けする」、「メジャースポーツ」などの回答が、フットサルに関するイメージでは「せまい」、「小さい」、「スライディングできない」などの回答が多く認められた。予備調査から得られた回答を参考に、サッカー及びフットサルの競技経験のある本研究者と共同研究者で、項目の選択について合議を行った。合議にあたっては、予備調査の結果において本研究仮説に合致すると考えられる、「ボディコンタクト」及び「ルックス」に関する複数の記述内容が認められたことから両者を表現する項目を含めること、さらに重複回答の多かったルールを表現する項目を含めることを申し合わせた。そして、サッカーとフットサルに対するイメージを測る質問項目として、「痛い-痛くない」、「かたい-柔らかい」、「厳しい-やさしい」等、「ボディコンタクト」を表現する 10 項目、「日にあたる-日にあたらない」、「黒い-白い」、「かわいい-きれい」等、「ルックス」を表現する 10 項目、「複雑な-単純な」、「大きい-小さい」、「広い-狭い」等、「ルール」を表現する 10 項目、合計 30 項目の形容詞対が選択された。

3. 本調査 1

3.1 目的

サッカー及びフットサルのどちらも経験したことのある女子中学生が、両競技に対して抱いているイメージを調査する。

3.2 方法

3.2.1 対象者 サッカーとフットサルのどちらも経験したことのある公立中学 1-3 年生の女子生徒 91 名であった。その内回答に不備のある 1 名を除いた 90 名分の調査結果が分析対象となった。

3.2.2 手続き 予備調査を経て選択された 30 の形容詞対に対して、サッカー及びフットサルそれぞれに対するイメージに基づいて回答するよう求めた。回答は「非常に・やや・どちらでもない・やや・非常に」の 5 段階評定で行い、分析に際しては左側から 1 点～5 点と得点化したものをを用い

ることとした。質問次元が重ならないよう項目の配列に配慮し、左右の形容詞対もランダムに入れ替えられた。なお順序効果を相殺するために、約半数の生徒はサッカーに対する回答が先に、それ以外の生徒はフットサルに対する回答が先になるよう、順番を入れ替えた質問紙が用意された。調査は2004年11月から2005年1月の間に実施された。

3.3 結果と考察

サッカー及びフットサルに対するイメージの平均値と標準偏差を表1左に示した。t検定を行っ

表1 サッカー、フットサル及びFスポーツに対するイメージの平均値と標準偏差

No	Item	Soccer	Futsal	F-sport
1	強い-弱い	1.99 (1.14)	2.63 (1.00)	2.81 (.93)
2	やさしい-厳しい	4.01 (.84)	3.19 (1.00)	3.14 (.97)
3	単純な-複雑な	3.82 (1.01)	3.46 (1.02)	2.81 (1.01)
4	暖かい-すずしい	2.39 (.96)	2.73 (.96)	2.72 (.99)
5	ハデな-ジミな	2.30 (.91)	2.89 (.96)	2.93 (.78)
6	かわいい-きれいな	3.19 (.63)	2.84 (.75)	3.12 (.78)
7	ゴツゴツした-フワフワした	2.39 (.93)	2.98 (.92)	3.20 (.81)
8	大きい-小さい	2.12 (.79)	3.53 (.94)	2.98 (.77)
9	やわらかい-かたい	3.37 (.89)	2.88 (.86)	2.94 (.95)
10	激しい-おだやかな	1.56 (.78)	2.49 (1.19)	2.66 (1.22)
11	こじんまりした-のびのびした	3.94 (.90)	3.08 (1.23)	3.62 (.93)
12	黒い-白い	2.50 (.95)	3.19 (.99)	3.40 (.94)
13	男性的な-女性的な	2.46 (1.02)	3.16 (.97)	3.26 (.94)
14	荒々しい-弱々しい	2.02 (.75)	2.80 (.95)	2.69 (.79)
15	日にあたる-日にあたらない	1.55 (.79)	3.23 (1.36)	3.06 (1.26)
16	しっかりした-おっとりした	1.97 (.81)	2.86 (.98)	2.47 (.98)
17	はなやかな-落ちついた	2.67 (1.01)	2.99 (.94)	3.00 (.96)
18	せまい-広い	4.52 (.69)	2.24 (1.11)	3.69 (.95)
19	さらさらした-しっとりした	2.94 (.72)	2.97 (.74)	2.88 (.66)
20	大胆な-しんちょうな	2.34 (1.07)	3.03 (1.20)	2.84 (.99)
21	流行した-昔からある	3.10 (1.51)	2.51 (1.09)	3.25 (1.10)
22	痛い-痛くない	2.06 (.98)	2.87 (1.18)	3.15 (1.28)
23	カサカサした-ヌルヌルした	2.72 (.67)	2.87 (.72)	2.98 (.45)
24	多い-少ない	2.01 (.83)	3.33 (.95)	2.94 (.79)
25	離れた-ひつついた	3.01 (.93)	3.32 (.88)	2.88 (.91)
26	汚れない-汚れる	4.26 (1.17)	2.59 (1.38)	2.63 (1.20)
27	暑い-寒い	1.96 (.97)	2.20 (.93)	2.48 (.94)
28	ダラダラした-きっちりした	3.67 (1.01)	3.57 (.91)	2.97 (.87)
29	遠い-身近な	3.71 (1.08)	3.59 (.93)	3.02 (.85)
30	楽しい-真剣な	2.43 (1.57)	1.96 (1.23)	2.41 (1.43)

M (SD)

た結果、26項目で平均値に有意差が認められた(表2左)。

サッカーとフットサルは極めて共通性の高いフットボール競技でありながら、ボールの大きさから競技時間、選手交代に至るまで多くの相違点が認められ、両競技の独自性が明らかになった。

表2 サッカー、フットサル及びFスポーツに対するイメージの差異

No	Item	Soccer		Futsal		F-sport		Futsal	
			t		t		t		t
1	強いー弱い	<	4.73**	<	5.85**	=	1.32		
2	やさしいー厳しい	>	7.18**	>	6.92**	=	.37		
3	単純なー複雑な	>	2.79**	>	7.30**	<	4.70**		
4	暖かいーすずしい	<	2.84**	<	2.47*	=	.05		
5	ハデなージミな	<	4.65**	<	5.52**	=	.37		
6	かわいいーきれい	>	3.19**	=	.74	>	2.59**		
7	ゴツゴツしたーフワフワした	<	5.08**	<	6.82**	=	1.89		
8	大きいー小さい	<	10.08**	<	8.09**	<	4.71**		
9	やわらかいーかたい	>	4.60**	>	3.36**	=	.48		
10	激しいーおだやかな	<	6.57**	<	7.59**	=	1.03		
11	こじんまりしたーのびのびした	>	5.37**	>	2.62**	>	3.69**		
12	黒いー白い	<	5.60**	<	6.99**	=	1.63		
13	男性的なー女性的な	<	5.24**	<	5.99**	=	.81		
14	荒々しいー弱々しい	<	6.36**	<	6.29**	=	.96		
15	日にあたるー日にあたらない	<	9.99**	<	10.08**	=	.96		
16	しっかりしたーおっとりした	<	6.48**	<	4.00**	<	2.87**		
17	はなやかなー落ちついた	<	2.71**	<	2.49**	=	.09		
18	せまいー広い	>	14.87**	>	7.11**	>	10.36**		
19	さらさらしたーしっとりした	=	.23	=	.71	=	.94		
20	大胆なーしんちょうな	<	4.25**	<	3.61**	=	1.27		
21	流行したー昔からある	>	3.08**	=	.84	>	4.94**		
22	痛いー痛くない	<	5.97**	<	6.81**	=	1.64		
23	カサカサしたーヌルヌルした	=	1.52	<	3.47**	=	1.49		
24	多いー少ない	<	10.56**	<	8.36**	<	3.35**		
25	離れたーひつついた	<	2.03*	=	1.08	<	3.60**		
26	汚れないー汚れる	>	9.55**	>	9.98**	=	.24		
27	暑いー寒い	<	2.18*	<	3.99**	>	2.16**		
28	ダラダラしたーきっちりした	=	.88	>	5.48**	<	4.91**		
29	遠いー身近な	=	.93	>	5.32**	<	4.71**		
30	楽しいー真剣な	>	2.99**	=	.09	>	2.48**		

**p<.01, *p<.05

Two-tailed test

4. 本調査2

4.1 目的

一般的な女子中学生がこれから参加したいスポーツ（以下、希望スポーツとする）に対して抱いているイメージについて、本調査1で使用したサッカー及びフットサルに対するイメージを測る質問紙を基に調査し、希望スポーツ及びサッカー、フットサルに対するイメージの差異を検討する。

4.2 方法

4.2.1 対象者 公立中学校に通う中学1～3年生の女子生徒131名であった。その内回答に不備のある1名を除いた130名分の調査結果が分析対象となった。なお、本調査2の対象者は本調査1の対象者とは異なる。また、両調査の対象者が通う中学校では、運動部活動として女子サッカー及び女子フットサルを実施していない。従って、本調査1の対象者に体育の授業以外におけるサッカー及びフットサルの経験があることを除けば、本調査2の対象者との間にサッカー、フットサルに関する環境に、特別な違いは認められないと推測される。

4.2.2 手続き 本調査1で使用された形容詞対を用いて、希望スポーツをイメージした上で質問紙に回答するよう求めた。従って、本研究から得られる希望スポーツに対するイメージは、サッカー及びフットサルのイメージに基づいて評定されたイメージを指している。回答及び得点化についても調査1と同様に実施された。調査は2004年11月から12月の間に実施された。

4.3 結果と考察

希望スポーツに対するイメージの平均値と標準偏差を表1右に示した。希望スポーツとサッカー及び、希望スポーツとフットサルのそれぞれについてt検定を行った結果、希望スポーツとサッカーでは25項目で平均値に有意差が認められたにも関わらず、希望スポーツとフットサルでは13項目に留まった（表2右）。このことから、全体的に見た場合、女子中学生にとってはサッカーよりもフットサルの方が希望スポーツのイメージに近いことが明らかになった。一方で、上記13項目の内、希望スポーツとフットサルの間のみ差が認められた項目は「離れた-ひつついた」、「かわいい-きれい」、「楽しい-真剣な」、「流行した-昔からある」の4項目であった。これらの項目はサッカーの方が希望スポーツのイメージに近い側面があることを示している。表中の値から女子中学生にとっての希望スポーツは、フットサルよりも昔からあり、真剣なスポーツであることが読みとれる。さらに、「離れた」、「きれい」への偏りは、思春期の生徒が示す保護される立場からの独立や自立への欲求とも関係していると推測される。これらの点においてサッカーはフットサルよりも女子中学生に受け入れられやすいと言える。また波多野（1998）が指摘するように低年齢から運動不足状態にあるなかで、女子中学生がスポーツに対して楽しさよりも真剣な取り組みを求めている事実は、スポーツの実施に際して、競技能力の向上やチームの勝利などの目標を設定し、真剣にスポーツに参加できる環境を整えることの重要性を表していると考えられる。

希望スポーツとサッカーの間のみ差が認められた項目は16項目であった。これら16項目の間には互いに関連する要因が含まれていると推測されたことから、希望スポーツに関するデータをもとに因子分析（バリマックス回転）を行った。固有値の落差と解釈のしやすさから3因子を選択した上で、共通性の低い3項目を除いて再度因子分析を行った（表3）。分析の結果抽出された第1因子は、「やわらかい-かたい」、「ゴツゴツした-フワフワした」、「痛い-痛くない」などボデ

アイコンタクトに関する項目から、第2因子は「荒々しい-弱々しい」, 「激しい-おだやかな」, 「大胆な-しんちょうな」など活動性に関する項目から、第3因子は「汚れない-汚れる」, 「日にあたる-日にあたらない」, 「黒い-白い」などルックスに関する項目から構成されていた。

表 3 Fスポーツとサッカーの間にイメージの差異が認められた項目の因子分析結果

No	Item	Factor loading			h ²
		F1	F2	F3	
9	やわらかい-かたい	-.78	.11	.17	.65
7	ゴツゴツした-フワフワした	.68	.00	.19	.50
22	痛い-痛くない	.66	.20	.17	.50
13	男性的な-女性的な	.61	.17	.41	.57
2	やさしい-厳しい	-.53	-.10	.14	.31
14	荒々しい-弱々しい	.44	.69	.16	.70
10	激しい-おだやかな	.54	.67	.09	.75
20	大胆な-しんちょうな	-.02	.66	.21	.48
5	ハデな-ジミな	.00	.62	-.22	.43
17	はなやかな-落ちついた	-.03	.57	-.22	.37
26	汚れない-汚れる	-.09	-.15	-.71	.54
15	日にあたる-日にあたらない	-.19	.00	.68	.50
12	黒い-白い	.24	-.05	.66	.50
Eigenvalue		3.07	1.84	1.55	
% of var		21.14	16.81	14.30	

希望スポーツとサッカーの間に差が出た項目において以上の3因子が抽出されたことから、一般的な女子中学生が参加したスポーツとサッカーの競技特徴との間には、ボディコンタクト、活動性、ルックスにおける差が含まれていると推測された。ボディコンタクト因子を構成する項目の平均値は、希望スポーツの方がサッカーよりも痛くなく、女性的な方向に偏っていた。サッカーと同様にボディコンタクトの激しいフットボール競技であるラグビーは危険度の高いスポーツと考えられ、体格的・体力的発達の途上にある小学生や中学生、そして特に女子には不向きだと考えられてきた。しかし中川ら(2000)は、近年タッチラグビーやタグラグビーというボディコンタクト要素を排除したラグビーゲームが紹介されたことにより、ラグビーは老若男女を問わない新しいゲームとして次第に普及し始めたとしている。ボディコンタクト要素の少ないフットサルは、接触プレーを恐れる小学生や女子生徒などにとって、サッカーよりも取り組みやすいと考えられる。活動性因子を構成する項目の平均値は、希望スポーツの方がサッカーよりも落ち着いた、おだやかな方向に偏っていた。活動性因子はボディコンタクトやルックスとの関係が想定されていた項目から構成さ

れているが、項目に含まれる活動的なイメージを中心に収束したと推測される。サッカーでは運動量を参加者の身体的な発達段階に合わせるために、いくつかの年代ごとにコートの大きさや時間の設定が行われている。しかし分析結果は、一般的な女子中学生にとってサッカーは活動性の高いスポーツとして敬遠される可能性があることを示している。サッカーの実施にあたっては、参加者の活動性を十分考慮に入れた上で、適切な時間やスペースを選択する必要があると考えられる。ルックス因子を構成する項目の平均値は希望スポーツの方がサッカーよりも汚れず、日にあたらず、白い方向に偏っていた。増島(1999)は、日本代表選手であっても試合への出場に際して日焼け止めを塗るなど、ルックスに気を配っていることを指摘している。実際にサッカーは屋外での練習がほとんどであり、日焼けや外傷によるルックスへの影響は少なくない。思春期にある女子中学生は自らの身体に対するイメージを重視することから、ルックスに対してネガティブな影響を与えるサッカーは、女子中学生にとって受け入れられにくい性質を内在していると考えられた。

ところで、「ルール」を表現すると想定された10項目は上記3因子に含まれなかった。一般的にルールはスポーツのイメージに少なからず関係すると考えられる。しかし、参加者の視点から見た場合、グラウンドの広さやボールの大きさといったルール自体よりも、ルールに基づいて表現されるプレーに注意が向くことから、スポーツのイメージに対するルール自体の影響は限定されるのではないかと推察された。

5. 結論と展望

本研究の目的は、サッカー及びフットサルの競技特徴を視点として、女子中学生がサッカー、フットサル、及び参加したいスポーツに対して抱くイメージの差異を検討することであった。本研究の結果、女子中学生が参加したいスポーツのイメージはサッカーよりもフットサルのイメージに近いことが明らかになった。そして女子中学生が参加したいスポーツのイメージとフットサルのイメージの近似、及びサッカーのイメージとの相違には、ボディコンタクト、活動性、ルックスの各次元が関係していることが推察された。本研究では他の発達段階や男子生徒を対象とした調査を実施していないため、本結果が思春期女子においてのみ認められるものなのかどうかについては不明であるものの、心理的な発達段階や性別によって、スポーツへの参加において重視されるイメージが異なることは想像に難くない。JFA(1998)は児童期から成人期までの選手育成システムの確立において、早くから身体的な発達段階に注目し、それぞれの段階に沿った強化の必要性を主張してきた。しかし指導者に必要な資質として、参加者の心理的発達段階を理解する内容が含められたのは極めて最近である。サッカー選手の心理的側面に関する研究が、Junge et al.(2000)やMiller et al.(2004)に見られるように、競技能力とパーソナリティの関係を扱った研究やスポーツマンシップに関する研究を中心に発展してきたことも要因の一つであろう。いわゆるゴールデンエイジ(9歳~12歳頃)を過ぎてからの数年間は、グループやチーム戦術を学習する上で非常に重要な時期であるが、心理的発達段階からすれば一生の中で最も不安定な時期と一致する。本研究で扱われたルックスは、思春期女子の心理を象徴する問題であるが、特に成人男性の指導者にとっては理解が及びにくい内容であると言える。思春期に限らず参加者の人生を視野に入れ、心理的発達段階に焦点を当てた研究の発展が望まれる。

引用文献

- 波多野義郎 (1998) 運動処方 of 理論と実際. コム : 東京.
- JFA (1998) 強化指導指針 1998 年版. JFA.
- JFA (2004a) 2003 年度 JFA 加盟登録チーム・選手数について. JFAnews, 241 : 66.
- JFA (2004b) 2004 年度女子登録選手数一覧. 未公開資料.
- Junge, A., Dvorak, J., Rosch, D., Graf-Baumann, T., Chomiak, J., and Peterson, L. (2000) Psychological and sport-specific characteristics of football players. *American Journal of Sports Medicine*, 28 (5) : 22-28.
- 神谷栄治 (1997) 思春期 : 前期. 馬場禮子・永井徹 (編著) ライフサイクルの臨床心理学. 培風館 : 東京, pp. 75-94.
- 増島みどり (1996) Homo in Sport. *AERA*, 12 (25) : 48.
- Miller, B., Roberts, G., and Ommundsen, Y. (2004) Effect of motivational climate on sportpersonship among competitive youth male and female football players. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sport*, 14 (3) : 193-202.
- 中川昭・森井研児・椿原徹也 (2000) 女子大学生の教材としてのラグビーの価値. 筑波大学体育科学系紀要, 23 : 99-108.

(2006 年 4 月 17 日受理)